

絵カード分類による子どもの概念化の実験的研究

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
内本 純子

子どもの概念化を検討するために、2つの実験が行われた。実験1、2とも類似の2つの試行を行った。実験1は5、6歳児の健常児に試行し、実験2は8、9歳の自閉症スペクトラム児に試行した。第1試行は16枚の絵カードを4つの仲間に分類することであり、果物、野菜、花、鳥の4概念に絵カード4枚ずつ分類できるように構成した。第2試行は、17枚の絵カードを、魚4枚、鳥5枚、虫3枚、動物5枚に分類できるように構成した。実験課題と並行して、新版K式発達検査2001と追加項目（円系列・三方向人物画・相手の左右等）を行い、各項目との関連を分析した。

結果は、構成した通りに分類し、概念的に言語化を行った場合（A群）と、構成した通りに分類したが、言語化が前概念的である場合（B群）、構成した通りに分類をしなかった場合（C群）に分けて分析を行った。

研究1では、A群は概念を一般化して使用することが出来ており、B群C群は概念の使用と、前概念の使用が混在していることが特徴的であった。これは、5、6歳が、機能・形態にとられる自己中心的性が崩れていないことを意味する。しかし、発達年齢をみるとA群が必ずしも高いとはいえなかった。むしろ、分類と分類に対する概念を、被験児自身なりに考察する必要があるC群の方が、高い能力を必要とすると考えられた。またB群、C群の中には「見たことがある」、「お母さんに教えてもらった」等子ども自身の経験を答えるなど、内在的基準で概念化しようとするのではなく、外在的基準を機械的に適用している場合が多数みられた。このような反応をした被験児の中には、他者視点を獲得しているものはいなかった。

研究2の被験児は発達検査の結果、7、8歳の転換期をこえられていないものが多数おり、研究1と同じく自己中心性がみられた。ここでも、A群が高い発達年齢ではなかった。これは、概念の基準を教授され、適用しているにすぎないようにも考えられた。しかし、研究1と違った点は、7、8歳の転換期をこえられているにも関わらず、自己中心性が崩れていない被験児がいたことである。さらに、他者視点を獲得しているにも関わらず、外在的基準を機械的に適用している被験児がみられた。自閉症スペクトラム児と自己中心性、他者視点の関係については、今後研究すべき課題とされる。